

| | |
|---------|----------------------|
| 氏名(本籍) | つかだよしみち 塚田良道(埼玉県) |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 博乙第2188号 |
| 学位授与年月日 | 平成18年3月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | 人物埴輪の文化史的研究 |

| | | | |
|----|--------|--------|------|
| 主査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 川西宏幸 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 常木晃 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 古家信平 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 根本誠二 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 丸山宏 |

論文の内容の要旨

本論文は、古墳時代に墳墓の表飾として樹立された人物埴輪を研究対象にして、そこに表象された意味を問うたものであり、先行諸研究の問題点を指摘した序章の論述に基づいて、3つの課題が設定されている。第1に人物埴輪の形態と配置の関係を考古学の方法によって体系化すること、第2に形態すなわち「形式」として表現された人物がいかなる社会的階層・性格やまた職掌を反映しているのかを究明すること、第3に人物埴輪の配置構造が示す意味をあらためて問うとともに、その隆替を復原して地域色が発現した原因を分析することであり、それぞれ、第1の課題は第1・第2章として、第2の課題は第3～第7章として、第3の課題は第8・第9章として論述されている。

序章「人物埴輪研究の課題」では、人物埴輪に関する研究史を克明に辿り、意味論が近年においてないがしろにされていること、先学の意味論が精確さを欠き、体系化に乏しいことを指摘する。そうして、その現状を打破する方法上の範を、日本考古学が育んできた土器型式学と、ヨーロッパの洞窟壁画を対象にしてルロア＝グーランが実践してみせた構造的研究所に求める。

これらの方法に準拠して第1章「人物埴輪の構造」では、多種にわたる人物埴輪を男女に分けて階梯的な分類を行う。そうして坐像、女子立像、男子全身立像、片腕を掲げる男子半身立像、盾を持つ男子半身立像の5形式が、一定の規則にしたがって順に配置されていることを見いだす。筆者が「構造」と呼ぶこの樹立上の約束は、時空を問わず一貫しており、人物埴輪群像の表している世界はこのような基軸で貫かれていると説く。

この結果を踏まえて第2章「人物埴輪の編年」では、前章で抽出した各形式を時間軸上に据えて変遷を辿り、また空間的に配して東西日本の隔たりをはかる。すなわち、東海地方以西の西日本と、関東地方を中心とする東日本との間で、人物埴輪の展開が大きく異なることを示し、女子埴輪の所作の画一性によって代表される西の「近畿様式」と違った展開を、関東地方の人物埴輪がみせる点を強調する。

第3章「古墳時代における坐の系譜」では、人物埴輪の坐像に焦点をあわせ、東アジア的視野から中国や朝鮮との比較を試み、坐像の男女はともに古墳の被葬者に相当するような高位の人物であり、このような上層階級の坐り方には性差がないと指摘する。すなわち、女性もまた倚坐の習俗を有した点に、中国や朝鮮と

は異なる倭の特色をみとめようとするのである。

第4章「権威の装備－塵尾と鈴鏡－」では、塵尾と呼ばれる威儀具の表現が男子埴輪に、鏡に鈴をつけた鈴鏡の表現が女子埴輪にそれぞれ伴う点を取りあげる。そうして、中国に淵源を發し東アジア的広がりを持つこの威儀の習俗が倭の男子有力者の間で流布していたこと、また、鈴鏡を腰に帯びる倭独自の習俗が高位の女性の存在を強調する目的から発していることを、先行研究の批判に立脚しつつ説く。

第5章「女子埴輪と采女」では、女子埴輪の代表的服飾である袈裟状衣を取りあげて、采女の「意須比」とみるすでに定説化した後藤守一説を、文献考証上からも検討し、「采女」の「肩巾」であると推断する。そうして、この種の女子埴輪に表象された職掌は、「采女」または采女的な食膳奉仕であるとする。つまり、女性の役割や社会的地位について、従来の巫女説を排して、「采女」とみるのである。

第6章「男子立像の職掌と階層」では、「鷹匠」や「馬飼」とされてきた男子立像を祖上にのせ、それぞれ「鷹匠」は支配者像、「馬飼」は被支配者像であると見て、同一視すべきでないことを述べ、さらに武装人物像の差異も問題にする。そうして、男子全身立像が近侍と護衛にあたる舎人、片腕をあげる男子半身立像が馬飼、盾を持つ男子半身立像が墓域の警護にあたる人物であり、各形式が近侍的な奉仕にあたる職掌という点で共通すると説く。

第7章「埴輪の軍楽隊」では、角笛を持ち、あるいは太鼓を抱える男子像に注目して、中国や朝鮮に類例を求める。こうして比較を進めた結果、これらの楽器を持つ人物像は、軍楽隊が存在したこと、また軍団組織の一環として倭に導入されたことを示すと推断する。

第8章「人物埴輪の意味」では、前章までの問題提起と各論を受けて人物埴輪の本質に切り込む。すなわち、人物埴輪とは、基本的に特定の人物に服属して奉仕にあたる近侍集団を、それぞれの階層や職掌を示す服装や所作で表現し、さらに、それぞれの相対的な場の関係を空間上に反映させた姿である、と結論づけるとともに、この帰結に拠って葬列説や首長霊継承儀礼説などの既存の説を批判的に検討する。また中国の俑とも比較し、俑の内容が、架空の鎮墓獸、政治的な鹵簿、食生活の裏方である厨房という三表現に集約されることから、人物埴輪の成立に俑の直接的な影響はほとんどなかったとみる。

第9章「人物埴輪の成立と展開」では、人物埴輪の成立の過程と背景を探り、変容と衰退を葬制の動向のなかに位置づけようとする。そうして人物埴輪が特色を発現しつつ遅くまで存続する関東地方をあらためてとりあげ、同地の社会や首長層の意識に測鉛をおろす。

すなわち、人物埴輪の出現については、前代の形象埴輪の一部に系譜上の淵源を求めつつ、他方、周濠付設による墳墓の隔絶化に墳丘の巨大化が加わり、死者のための空間が拡大して墳丘装飾が促されたことによる。そうして、このような背景の下に近畿地方で出現した人物埴輪は、畿外各地に伝播して九州から東北の諸地方に拡がるが、その衰退については、東西で時期や経緯に差異がみられるという。

続いてその原因について論を進め、まず横穴式石室を取りあげる。すなわち、近畿地方では人物埴輪の衰退が横穴式石室の流行と期を同じくする点で、被葬者に対する奉仕の場が墳丘から石室内へ移ったことがその衰退を促したと考えられるのに対し、関東地方では石室導入後も衰退の色を見せず、無所作に形を変え配置規則を崩しながらも存続して、前方後円墳の終焉にまで至ると説く。

こうして関東地方の特色を示したうえで、次に前方後円墳の形態に論点を移し、同じ形態が後代に継承されている点が、同地方に営まれた墳墓の形態上の特徴であることを例示する。すなわち、中期形態を引き続いて踏襲する群馬・埼玉地域と、後期後半に独自の形態を生む千葉・栃木地域とに分離されるが、いずれにせよ近畿地方の動向とは離反している。いちやく離反の動きを見せるのは群馬地域であり、人物埴輪の無所作化や配置規則の崩壊もまたこの地が核になっている。したがって、人物埴輪の変容と存続とにおいて、関東地方が群馬地域に代表されるように独自の動きを見せる根底には、有力者間に畿内の模倣にとどまらない独自の文化形成があった、と述べる。

審査の結果の要旨

本研究の多岐にわたる論述によって、人物埴輪研究は一新され、新たな地平を獲得した。実証性を欠く空論にとどまり、あるいは個別研究に終始してきた従前の研究は、一貫性を備えた体系を得て、東アジア世界の中で相対的位置を占めるまでに至ったのである。また本研究は、人物埴輪の域にとどまらず、ジェンダー論にも、基層文化論にも発展させうる芽を胚胎させている点も評価される。本研究は地味で堅実な個別論のように見えるかもしれないが、人物埴輪研究に徹することによって、その稔りを余すことなく汲み、古墳時代研究に新たな展開をもたらす萌芽性をそなえているといえる。ただし、横穴式石室や前方後円墳の形態だけにとどまらず奥つ城を構成する諸属性とその変化とをとりあげた造墓史、当時の人々が墳墓にいだいていた思念とその変化を辿る心性史をとりあげて、さらに論を重ねてほしいという点があげられる。また末尾の論考を関東地方に導かざるを得なかった点も、列島史の観点からすれば惜まれるし、論文構成上の一貫性を欠く印象を与える。さらに文化史という概念への論及も必ずしも十分とはいえない。しかし、これらの点については、なお研究途上にある筆者の次の仕事を見守るべきであろう。そうしたとしても、本論の帰結と萌芽性は十分に評価され、学界への寄与も大きいと考えるからである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。